

人間的尊厳のあしもと

近 藤 良 樹

(広島大学名誉教授)

1. 歴史は、人間の尊厳を無視しつづけた

【人は、近代になってやっと尊厳の扱いを受けた】歴史は、人間を悲惨な目にあわせ続けた。助け合ってしかるべき人間同士であろうに、逆に差別し、争い、殺されることも多かった。生き残っても奴隷となって辛い目にあわされた。奴隷は、人間ではなく、物や動物と同じ扱いであった。奴隷が殺された場合、殺人であるが、そのようには解されず、物が壊されたのと同じ扱いとなっていた。奴隷から解放されれば、人間として扱われたのであるから、もともと人間として存在していたのである。その自由になった人も、いつ、物扱い、動物扱いされるかも知れなかった。人の尊厳は無視された。

神は、その存立のはじめからおそらく尊厳を有するものとして立てられた。王もまたその共同体の全体を担い統括する支配者となって、尊厳の扱いをされた。だが、神や王と同じ能力を持っていたはずの人間は、被支配者にと縛り付けられ、神や王の下僕にとどまり続けた。神と人は、古くは同等であった。人に神が乗り移ったし、死んだら、人は、神、祖先神になった。キリスト教のような超越神をいうものでも、人は、神の似姿をもち、動物世界の支配者になると説いた。それでも、人は、神の惨めな被支配者と見なされるだけであった。王と一般の者の間でも、王の被支配の者たちは、その王の尊厳を支える惨めな下僕でしかなかった。人類史は、人間の尊厳を無視しつづけた。

【人間的尊厳の危うい足元】人間は、万物の霊長として、尊い存在であるが、

歴史の圧倒的な時代において下賤の扱いをされ続け、近代になってやっと尊厳が言われるようになった。それでも未だに、ひとは、虫けら扱いになることがしばしばである。近代の戦争は、何百何千万もの人間を殺し傷つけてきた。独裁者たちは、自国民すらも平気で飢餓や戦争の犠牲にした。近現代の悲惨な犠牲を踏まえて、国連や各国の憲法などに人の尊厳がしっかりと記されてきているけれども、いまでも戦争や飢餓で犠牲になることが繰り返されている。

ひとは、他方では、当の人間的尊厳にふさわしい生き方を自身でしていくことがなくてはならないのでもある。万物の霊長ではあるが、支配する自然に対して尊厳をもった卓越したあり方をしているとは言いにくい面も持っている。環境破壊は、深刻である。人間の尊厳にふさわしい自然支配・制御が叫ばれているけれども、年々、地球は人によって汚染され破壊の度を強めている。また、社会的に生の安寧が保障されている中で、人間にもとる愚劣な生き方をして自らに尊厳を踏みにじっている者も希ではない。

2. 尊厳は、至高の支配者への勲章

【尊厳成立の根本】尊厳は、神や王のような至上・至高のものに付与される。だが、至上でも、けん玉世界一とかミスワールドには尊厳を帰さない。尊厳には支配者であることが必要なのであろう。支配関係は重層的になることも多いが、その場での支配者に尊厳は帰される。課長に尊厳を帰す場面では、社長は消えているのでなくてはならない。課長が尊厳であるのは、その課内で支配・被支配の完結しているときに限る。下位から上位にならんで、そのトップ、至上のものが下位のものに向き直って唯一の支配者となって、これにその被支配の者が尊厳を帰すのである。

人間の尊厳では、人間が至高の支配者と位置付けられ、その被支配者は、人間に対置されるものとしての自然・万物ということになる。人は、万物の霊長

と言われ、自然を支配する至上・至高の存在であり、その卓越した自然支配において人間の尊厳は可能となる。カント『人倫の形而上学の基礎づけ』は、人間における、感性的自然を厳格に制御・支配できる理性的自律に絶対的価値を見出して、これに尊厳を帰し、シラー『優美と尊厳について』は、人間精神による自然感性の「支配 Herrschaft」に尊厳を帰した（cf. 近藤良樹『人間の尊厳－尊厳は支配関係に由来する－（論文集）』広島大学図書館リポジトリ（<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00020345>））。

【尊厳の支配者に、被支配者は拝跪する】古代、共同体がひとつになって行動すべき時、至高の存在をたてて、これに従って整然と行動を起こすことが求められた。小さくは家族をまとめる家長、共同体の長老をたてた。それが一層大きくなると、諸家族・共同体の共通の祖において、同じ祖先神において一糸乱れぬ行動が可能となった。その祖先神とか、さらに、権威のある神の憑依した巫女や族長などを支配者とし、その命令を求めることになった。このトップを絶対的なものとして、侵し難い存在とみなし、これに拝跪して従うことになった。その拝跪の振る舞いが尊厳を作り上げた。

尊厳では、絶対的で威力をもつ支配者（神や王）へ被支配者がまつろい、拝跪する。豪族たちは、各々が自尊の独立的な存在としてあったろうが、それらに勝る強力なものが、これらを征服してまつろわせ支配者となっていった。このトップの力に屈服し服従することを、はじめはおそらくいやいやながら行ったであろう。その力の圧倒的にちがうことを踏まえて、従順に服従し、これを祭り上げ拝跪するようになって、そのトップの支配者は、尊厳の榮譽をもって迎えられることになった。その支配者は、侵し難いものとなり、五体投地をもって拝跪する対象となった。侵せば、弾圧され恐怖させられる圧倒的な力をもつのが尊厳の支配者であり、尊厳の対象には、畏怖・恐怖の感情をともなう。他方、拝跪し従順に被支配者となるならば、至高の卓越した支配のもとでの恩

恵を享受でき、その統治は安寧をもたらす。信頼でき、帰依し賛美できるのが尊嚴のトップであった。

【尊嚴は被支配の者が付与する勲章】至高のトップに尊嚴を帰すのは、その被支配者に限定される。キリスト教の神に尊嚴を帰すのは、その信者のみである。王に尊嚴を帰すのは、その被支配者だけである。隣国の者は、尊嚴どころか、しばしば、粗暴な侵略者とみなし、軽蔑する。家長を尊嚴と見なすのは、その家族だけである。そとでは、うだつのあがらない中年男と蔑視されるのが落ちである。つまり、トップ自体が尊嚴という属性を内在しているのではなく、被支配者が、外から尊嚴の称号・勲章を与えるのである。

人間の尊嚴は、万物の霊長のこと、古代からあってしかるべきものであろうが、そうならなかった。客観的属性として人間に尊嚴が内在していたのであれば、これほど歴史は人間を蔑ろにして傷付け続けることはなかったであろう。尊嚴は、尊嚴の当体の外から付与する勲章のようなものゆえに、本源的に卓越して尊嚴の要件を整えている人間であっても、尊嚴とはみなされないということがありえたのである。

3. 人間の尊嚴に特徴的なもの

【自律的な理性による自然の支配】さて、人間の尊嚴であるが、これも尊嚴としては支配・被支配のもとに捉えられる。ひとは、万物の霊長と言われ、自然を超越して、これを巧みに制御・支配する。この世界では、無機物、有機物・生命があり、その上に至上・至高の存在として人間が君臨している。トップに位置する人類は、以下のものに向き直って、唯一至高のものとして自然を支配している。その第二位の霊長類との遺伝子の違いは1%ほどに留まるというが、トップとして向きを第二位以下に向き直って、二位以下をすべて被支配の存在とし、これを支配している。

理性をもってこの自然を超越して、自律的に存在し目的論的に人は生きる。自身で目的を立てこれを実現するために手段（因果自然）を働かせて自律的に動く。その理性の営為は、因果自然を超越したものとして、自然世界にとって至高で卓越したものである。自然は、人間の理性に支配されるものとして、人間に尊嚴の勲章を捧げてしかるべきである。が、第二位の靈長類にすら、その能力はない。ひとの尊嚴は、ひとによる自画自賛ということになる。

さらに、人間は、自身のうちに自然を内在している。身体・感性の自然である。これを人はその理性のもとに自律的に制御・支配している。自然感性は、当然、動物的に振舞うが、これが理性からみて好ましくない場合、禁止する等の制御を行う。ひとも快不快の自然で動くけれども、必要なら快を抑止し苦痛を甘受もできる。自身の感性にとり、理性的自己は、卓越した支配者であり、エゴの感性の見事な制御を行い、その尊嚴を明かす。

【垂直型の尊嚴のもとでの水平型の尊嚴】人の尊嚴と、神や王の尊嚴は、至高の支配者の尊嚴としてあることでは同じである。しかし、その尊嚴が具体的に働く場面は異なる。人の尊嚴は、自然への至高の支配に成り立つが、それが実際に働く場面の多くは、そこではない。人間同士が尊嚴をもったものとして関わり合い尊重しあうのが、多くの場合の尊嚴の現われる場となる。神や王では、被支配・下位の非尊嚴のものが上を見上げ拝跪することに尊嚴は働く。だが、人の尊嚴が実際に働くのは、同等の人と人とのかかわりにおいてである。神や王では、垂直型の尊嚴として尊嚴は問題になるが、人の場合、尊嚴を有した人同士の対等の間で、いわば水平型の尊嚴としてこれが現れることになる。

しかし、二つの型の尊嚴があるわけではない。尊嚴の存立自体は、垂直型一つに負う。人の尊嚴も、被支配の自然が、支配する人類に尊嚴を帰すものになり、垂直型の尊嚴が根本にある。ただ、その働く場が、自然と人間という垂直の場面であるよりは、普通には人同士になるということである。人と人とが

いずれも、尊厳を有した存在として尊びあい、差別なく関わりあうというのが、人の尊厳の働く場面になる。人の尊厳は、類の尊厳である。万人がその類の尊厳を分有する。自律的理性が人類の尊厳の中核にあるが、この理性が働くのは、人類の全員においてであり、万人が理性を有する。したがって、個々人が、全成員が同じように尊厳も分有する。類の具体化した多様・多彩な個人において、その全成員が同じように、対等に水平に尊厳を有する。人の尊厳は、類としての垂直型の尊厳のもとで具体化して、水平型になって人と人との間に働くのである（神や王の尊厳とちがう、人間的尊厳が実際に働くことになる主要な場面の、水平型の特殊性については、ウェブは 私のHP「そろそろ逝くべき近藤良樹の戯れ言」(<http://hiroshimakondo.blogspot.com/>) の『苦痛の価値論』の「6-6. 未来を創造する、人の尊厳」を参照下さい）。

人間の尊厳は、まずは、垂直型において被支配の自然（外的自然と、自身の感性的自然）のもとに成立する。感性は、至高の理性の制御・支配に尊厳を感じることになる。また、外的自然について、理性のもと目的論的展開をすることで、因果自然を制御・支配することに垂直型の尊厳を見ることになる。だが、多くの場合は、人間同士が相互を尊重すべきときに、尊厳の扱いをせよという。ひとはすべて理性的な類的尊厳を分有するのであり、お互いが同じ対等の尊厳の存在となっているのであるから、相互において差別したり軽視したりすることなく、その尊厳を侵すことなく、尊びあい、自分にするように他者も大切にしなければならぬと水平型の尊厳をいうことになる。この水平型の尊厳においては、相互が尊厳を有するのだから、垂直型のように、至高のものへと拝跪する姿はとらない。対等の者同士として、敬意をもって相互に厳かに振舞いあう程度になる。場合によっては、他者の尊厳を侵してこれを自分のための犠牲にしたり、尊厳を無視するようなことがある。自身が尊厳であるのと同じく他者も尊厳を有するのであり、この尊厳の侵害を戒めることが必要となる。他者

を手段とし犠牲にする場合は、その当人の自律理性がこれを了解して犠牲になることを納得するようにと説得し、敬意を払って関わるべきである。

神や王の垂直型の尊厳は、いまは、あまり問題にならない。しかし、尊厳自体は根本的に垂直型になる。家長の尊厳は、もう古くなっているが、社長や課長、あるいは校長とか市長といったものの尊厳は、立派に通用している。ここでは、尊厳は、たぐいまれな唯一の至高の者のそれである。他方、水平型は、類的に尊厳が言われるもの（これ自体は垂直型になる）における、その多様多彩な種・個において、その類の尊厳の分有がいわれるところに成り立つ。昨今よく言われる生命の尊厳は、人間の尊厳とともに、この水平型に属する。生きとし生けるものは、すべて等しく生命という尊厳を分有したものと見なされて、差別することなく水平・対等に取り扱い、あらゆる多彩・多様な生について、その尊厳を言う。

4. 尊厳存立の肝要は、これを付与する側にある

【被支配側からする尊厳の付与】天神祭の怨霊の菅原道真も、祇園祭の疫病の元凶の牛頭天王（ニスサノオ）も、はじめは、恐怖の対象であった。祟り、疫病・災いの主として恐れられたものを、自分らのところだけには危害を加えないで安らいでいて下さいと、神にまつりあげ不可侵の高みに置いて遠ざけた。その災いの根源となるものを遠ざけ祭り上げることで、邪悪な面は他所を向いてくれて、災いはまれなことでもあり自分たちの無病息災を可能にしてくれるものとなった。畏怖しつつ、恵みの存在にと仕立て上げられていった。拝跪し、ありがたい尊厳の存在を作り出した。

これは、日本の王、天皇の尊厳の形成でも似通ったものだったであろう。どこでもそうであるが、王の尊厳は、被支配者・臣下が拝跪して賛美することで成り立つ。地方の豪族は、支配に従わない独立自尊状態では、当然、尊厳を帰

すこともない。だが、鎮圧され支配されて、まつろう状態になって、まつりあげ、たてまつるならば、つまり拝跪するならば、その征服者、支配者は、尊嚴の冠を被支配の者から載せてもらうに至る。我が国の宮中では、新年の歌会始が今でも全国から秀歌を集めて行われているが、その起源をたずねると、この尊嚴の戴冠の儀式だったのかも知れないという説がある。日本が大和をもって統一国家となったとき、まつろわぬ豪族を鎮圧し「国譲り」をさせ被支配者としていったが、その後、全国の豪族の代理となる者たちを集めて新年の度に、ことほぎ、まつろうこと拝跪すること、「服従」の確認を行った。それが、歌会始の起源かも知れないというのである。国々にはその地方を自由にする魂、威靈があったが、その籠った「国風（くにぶり）の歌を奉ると、天皇に威靈が著いたのである。そこで、歌を献じた地方は、天皇に服従する事になる」のだと（折口信夫「古代人の思考の基礎」の「一 尊貴族と神道との関係」）。各地方の靈力を天皇に乗り移らせ、奉り、拝跪して、「毎年初春に、服従を新しくしたのである」（折口「同上」）。つまり天皇に拝跪し「尊嚴」を新年毎に再確認する行事として、歌会始のはるかな起源があるのではとの推定である。歌を献じて尊嚴を付与していくことを、新春を迎える毎に繰り返して行ったもののようである。いくら立派な神や王であっても、その部外者たちは、尊嚴を帰さない。被支配者がこれにまつろい、まつりあげて拝跪する主体的な営為があってはじめて、尊嚴は成立する。

【心構えとしての尊嚴、共同幻想】尊嚴は、支配者に内在するものではない。至上・至高の優れた能力を内蔵するからといって、それがただちに尊嚴となるのではない。尊嚴は、その至上の存在に対して、そこから、その被支配者側が付与するものになる。その限りでは、主観的なもの、心構え、思いとして尊嚴はある。その被支配者がその思いを捨てるなら、即その至高の存在の尊嚴は消失する。キリスト教の神の尊嚴は、信仰を捨てるなら消滅する。その点では、

尊厳は、幻想、みんなで抱いている共同幻想だということになる。

尊厳は主観的な価値づけであるが、それを踏まえてひとがその身をもって尊厳（へ）の振る舞いをするということになると、尊厳は客観的世界に存在するものとなる。殴ろうと思っただけなら主観内の観念にとどまるが、実際に殴った場合は、客観的に実在する暴力行為となる。神の前に五体投地すれば、神自体はなくても、尊厳の振る舞いはしっかりと存在する。神の尊厳を表すために壮大な教会を立てれば、尊厳の建物として客観的に存在する。もちろん、肝心なのは、尊厳の心構え、思いである。その思いが消失したら、客観化されている尊厳の建物は、その魂を失い、廃墟にと変貌してしまう。

尊厳がその対象のそとからする価値づけ、心構えであるため、これを見る人によって、雲泥の価値評価の違いが生じることもある。人の受精卵について、これを尊厳と見るかどうかということが問題になっている。受精卵といえども、人間のそれであれば、人間の尊厳を有すると見なすことがあるし、逆に、まだ、尊厳を有するものとは見なしえないと、人間的尊厳のもとでの特別扱いはしないというひともありうる。神や王の尊厳など、信者・被支配者が帰すだけで、部外者は、尊厳とはみなさないのが普通である。

【尊厳の裏表、畏怖と賞讃】 尊厳は被支配者側が支配の在り様を尊厳と価値評価して成立する。尊厳と思うのは、至高で尊いものと価値評価することであるが、他方では、厳しさ、厳めしさという反価値を含む捉え方となってもいる。何ととっても被支配側にあるものの評価であり、支配される場合、単なる制御では済まず、いやなことを強制される面をもつから、その方面からは、反価値と感じられるものともなる。

最近の神は、慈悲の神が多いが、古くなるほどに、畏怖の神であった。キリスト教の聖書に描かれる神にしても、単なる愛の神ではない。従わないものを厳しく罰する畏怖の神でもある。旧約の神など、墮落した町だといって全滅さ

せるようなことを平然と行う戦慄の神であった。尊嚴をもって拝跪する以外なかったが、その尊嚴のもとでは、賛美や感謝などよりは、恐怖、驚愕の感情を抱く方が多かったことであろう。

しかし、畏怖は尊嚴の否定的側面であり、尊嚴は、むしろ積極的で高い評価を主要な面とする。ひとが集団として対処していくには、全体が一つになることが必要だったが、尊嚴をもつ者からの命令であれば、これに拝跪する全成員が一糸乱れず動きえた。各自が勝手な方向へ動くのをやめて、尊嚴においてひとつになったのであり、それは、尊嚴を担う神や王の力として現れた。尊嚴のもとに、頼りがいを感じ、尊嚴の対象に依存し、これに帰依する心を抱くことともなった。畏怖とともに、恩寵を感じ、賞讃、感謝、帰依といった大きな価値評価を尊嚴のもとに行った。尊嚴は、被支配者に対して、不可侵の高みの支配者に威嚇されての畏怖の気持ちを抱かせつつ、ありがたい統治・制御として讃嘆・賞讃の思いをもたせるものであった。

なお、人間や生命の尊嚴の場合、特殊である。人間のうちの自然感性を理性が制御しての尊嚴では、厳しい支配の面と、ありがたい制御ということの両面をもつだろうが、人間同士に尊嚴が問題となる場合は、尊嚴を有した人同士を尊重しあうことが中心だから、水平、平等のかかわりであり、敬意を表しあう程度になるであろう。ただし、そこで差別は許されないと尊嚴の御旗を掲げて出てこられるような場面では、尊嚴のもつ畏怖させ威嚇し脅迫的にもなる面が感じられて萎縮させられるようなこともある。

5. 人間の尊嚴では弱者の尊嚴が肝要となる

【神の尊嚴では上を見るが、人間の尊嚴では下を見る】尊嚴は、至高の支配者への被支配者からの讃美として成立する。それは、人間の尊嚴でも同一である。人の尊嚴は、万物の霊長の人類が自然を支配するところに、被支配の自然

から見ての至高の支配に成り立つ。その自然のうち、自身の感性的自然については、自律的理性による至高の支配・制御があつて、感性や衝動は、理性による良識と良心をもつての支配に拝跪する。だが、外的自然の支配では、自然が直接に賛美して尊厳をもつて応える能力はなく、人間の自画自賛となる。さらに何より神や王の尊厳とちがうことは、類としての尊厳であるため、その類の無数の成員の尊厳が問題となることである。その成員は、各々理性を有して類の尊厳を分有する。多くの場面で、その各成員間での尊厳が問題となってくる。

各人が人間的尊厳を有するのであり、これに関わる者は、同じ尊厳の存在として相互に対等に対応することが求められる。だが、社会的なかかわりでは、支配・被支配になって、強者・弱者の関係になることがある。そのとき、強者の方の人間的尊厳は、強者の威嚇が可能だから守られるが、弱者のそれは、ないがしろになりがちである。したがって、人間的尊厳を守れと主張されねばならないのは、弱者の尊厳になる。国家・社会が強制力をもつて、弱者の尊厳を通用させることになる。神や王の尊厳は、至高の強者の尊厳であり、被支配の弱者が尊厳をそれに帰すのであるが、人間的尊厳では、むしろ、弱者に尊厳を帰すことが肝要となる。神や王の尊厳では、上を見て拝跪するが、人間的尊厳では、それが実際に働く場面は、しばしば弱者においてであり、下を見て、これを差別することなく、自分と同じ尊厳を有するものとして、自分と同じ水平の位置にと高めていくことが必要となる。

人間同士の尊厳においては、まずは、全員が尊厳を分有しているものとして相互に尊びあいながら、対等・平等にかかわることである。自分にするように、相手も大切にしなければならぬ。神や王の尊厳と違い拝跪することは無用である。相手も自分も同一の尊厳の担い手なのであり、相互に敬意を表しあうにとどまる。弱者や敵に対しては、軽視したり攻撃的になったりと否定的に振舞うことが多くなるが、かれらも同じ尊厳を有した至高の存在であることを踏ま

えて、隣人愛の心をもって慎重に接することが求められる。

【生成（Werden）、当為（Sollen）としての人間の尊嚴】人は、類として尊嚴をもって理性的に生きる。猿から進化して万物の靈長となり自然を支配して尊嚴の位置に立つに至った。神のようにもとから尊嚴であるのではなく、尊嚴にと歴史的に生成したのである。理性を核とした人類の尊嚴は、各個体に分有されるが、その個体は生成消滅のもとにある。核となる理性を分有するが、それは、学習・教育をもって自然超越の理性的存在にふさわしいものにと生成するのである。個は、社会の中で、その社会的役割や使命を担って具体化し、未来への各々の自己実現をもって、尊嚴にふさわしい生き方をする事となる。

自律的理性は、個のもとで、おのれの感性・衝動の制御・支配において尊嚴を表す。感性を制御する理性は、自律的に、あるべき未来に向かって生き、良心・良識をもって当為を立てて自己実現していく。自律は、個の理性的営為の根本である。対自然においても、因果自然を踏まえつつ自身で目的を作り出し自律的に未来に目的を実現していく。個として具体的に生きる場面では、多彩・多様な生き方となる。各個の生きざまは、他に代えがたい個性的なものになり、唯一の実存という特性を示すことともなる。

【人間的尊嚴の確かな足元】尊嚴というと神だが、この神への拝跪の姿勢をやめると、神の尊嚴は、即消滅する。おそらく、神自身も消滅する。神に帰している至高の中身は、その全知全能の様態は、フオイエルバッハが言ったように、人間における卓越した価値を人自身から神へと疎外して成り立っている。この神への疎外を止め、これに拝跪して尊嚴と見なすことを止めれば、神は消滅する。王にしても同様で、被支配者が服従をやめ尊嚴を帰すことを止めれば、ただちにその王は、裸の王となり、王としては存在しえなくなる。

これに対して、人間的尊嚴の場合、尊嚴の称号を奪ったとしても、神や王と違い、人自身は消滅することはない。歴史の中では非尊嚴扱いで散々な目にあ

ってきたが、人間は、しっかりと存在し続けた。人間的尊厳の場合、各自が至高の理性をもって理性的自律に生きており尊厳の根拠を自身のもとに有している。その自律理性をもって目的論的に未来に向けて生きていく自然超越の在り方は、尊厳が帰されようと否とにかかわらず健在である。尊厳の根拠をなす自律理性は、ひとから奪うことはできない。神や王は、尊厳のみが存在自体の根拠も被支配のものにもつから、その被支配のもの次第で、その尊厳も存在も簡単に無化することとなる。だが、人の尊厳は、類的にも各個人においても、自律的理性をもってなっているのであり、尊厳扱いされなかったからといってなくなることはなく、その卓越した理性は、しっかりと実在し続ける。

6. ひとの尊厳も、やがては無用に

【生命等への尊厳の拡大】人間の尊厳は近代になっての喧伝だが、さらに昨今は、生命の尊厳もしばしば言われる。いずれも類としての尊厳であり、その類の下のすべてがその類の尊厳を分有して尊厳の担い手と見なされる。人間的尊厳は、万人に帰される。生命の尊厳は、生きとし生けるものすべてに帰される。さらには、この宇宙そのものも尊厳といえ言える。宇宙を見上げれば、無限に広がり壮美・崇高の念を抱かされ、自身をケシ粒の被支配者にも感じる。逆に小さい方向に目をむけても、その微小の世界の見事さには驚嘆させられ、至高で見事と尊厳の称号を与えたくもなる。尊厳は、これを帰す者の思い・心構え次第であり、あらゆるものに帰すことが可能である。

万物に尊厳を帰すということになると、尊厳が水増しされてその高い価値づけは失われがちとなり、尊厳の効果は薄まっていく。あるいは、すべてが尊厳となると、尊厳は比較を絶した至高のものという絶対視のもとにあるから、客観的な比較考量も困難になる。生命の尊厳だけにとどめても、その類のもとに尊厳を分有する無数の生命があり、価値評価において尊厳で同一となったので

は、そこでの生命同士の対立を解決することに支障をきたす。何れかを優先すべき場合には、尊厳のレッテルは剥がさねばならない。

尊厳というと神や王のそれであるが、この尊厳は、古代には必要だった。尊厳の神において全体がひとつになって一つの意志のもとに偉大なことをなしてあげていった。その後、王において、全体の意志はひとつになった。だが、それは、しだいに、社会自体が組織力を高めて合議をもち、全体の意志を全員のもとに表現できる仕組みをつくり、無用となっていった。神も王も、現代人の前からは消えた（なお一部に、現代に寄生しつつ都合のいいところだけ神を持ち出して古代中世に生きる人たちもいるにはいる）。

人間の尊厳は、無視され続けたが、近代はその尊厳を顕在化させた。弱者の人的尊厳は、その後も侵されてきたが、それを国家等がいましめ、犠牲にされる弱者の救済のために、大いに尊厳は役立てられてきた。これも、弱者が強者と同じように扱われるようになると、尊厳を侵すなど言う必要はなくなる。自然の至高の支配を人の尊厳の根拠とするが、自画自賛である。万物の霊長ではあるが、自然は自然法則にしたがうのみで、人間の無理やりの恣意を受け入れることはない。尊厳などで誇張することなく、人が制御・支配できている領域と、これのできていない領域等について、客観的にみて合理的な対処をする方が好ましいことである。

【フラットな社会に尊厳の言葉は無用】人間的尊厳では、人同士が差別なく同等に尊厳の扱いを受けることが肝要となる。自分の尊厳と相手の尊厳は同じなのだから、自分が相手になすことは、自分になすようにすべきこととなり、それが徹底されるときには、ことさらに尊厳をいうことはなくなる。上に見て萎縮したり下に見て蔑ろにしないことが当たり前となれば、尊厳の出る番はなくなる。

人の交わりが、まだ、支配と被支配の関係になることがあるとしても、しだ

いにそれは変わってきている。神や王を背景に階級制・身分制のような上下に国民を分断することが古くから続いてきたけれども、それが解消されて、万人平等の思想が一般化している。家庭でも、家長は、もうおそらく日本など先進的国家では、無意味になり、尊厳を無用化している。いまなお、支配関係にある代表は、会社などの企業である。ここでは、トップの尊厳の生きていることが多い。それでも、若い者は、自分たちを支配するトップに尊厳の念をもって関わることは少なくなっているように思われる。社会全体がフラットになって、人の間柄に上下の軸をもつことはなくなりつつある。

周りを見渡しても、昔とちがって、身分がちがう、家柄がちがうとか、名門校の出だとかで、格別の上下の違いを言い合うことは、少なくなっている。社会的な交わり全般がフラット化している。虎の威を借りるキツネのような生活はどんどん消滅していつている。尊い生き方をしているものは、それを客観的に見て素晴らしいと評価すればいいことで、その支配下に入って被支配者として拝跪することないし、それを絶対的なものにと誇張し威嚇して尊厳など言うことはないのである。上を見上げて拝跪する尊厳の姿勢は、まれとなり、人間的尊厳ですらも、差別なしの対人関係のもとでは、無用の長物となる。とどのつまりは、フラット化した合理的なすぐ先の未来において、尊厳というあり方と言葉は、消滅することになるのではないかと推測される。

The Foundation of Human Dignity

Yoshiki Kondo

Dignity is fundamentally something that the ruled give to their ruler, and it is a title or a medal given to him in praise of their ruler as supreme and eminent. This is a relationship of domination at its root. As such, the world's fastest runner or Miss World cannot be honored with dignity. Dignity requires the act of bowing down to the ruler. Human dignity is established in humans as the supreme and outstanding ruler over nature. Since nature itself cannot bestow the title of dignity, humans must do so themselves. It is, in essence, self-praise. Human dignity and the dignity of gods or kings are fundamentally the same, consisting of the worship of the ruled toward the supreme ruler. However, human dignity, in actual situations, has a different aspect. Each individual's dignity is derived from the shared dignity of humankind. The issue arises when the dignity of weaker individuals is disregarded, often because they lack the power to demand it. It is crucial that human dignity be recognized for the weak, without discrimination. In the case of gods and kings, dignity looks upward and is ascribed to the supreme in the vertical direction. However, with human dignity, individuals usually ascribe dignity to each other. This leads to horizontal dignity; furthermore, it is necessary to pay attention to the downward direction and ascribe dignity to the weak.